台大日本語文研究第 49 期
2025 年 06 月，頁 49-80
2025-04-15 收稿，2025-05-30 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP. 202506_(49).0003

試探《百人一首》中的「羈旅」：與定家選歌意識的交錯

楊錦昌*

摘要

一般提到《百人一首》，通常會被認為是由藤原定家所編撰，然而有關其撰者及成立等問題，迄今尚難指稱已有定論。儘管如此，關於每位歌人僅擇一首代表和歌的基準，以及按照時代順序排列秀歌的原則，至並未有顯著的異議被提出。再者，若從「部立（主題類別）」結構觀察《百人一首》，可以發現其主要是立基於敕撰和歌集的傳統，由戀歌、四季歌、離別、羈旅及雜歌等類別組成，並有廣泛運用掛詞與歌枕等和歌修辭的現象。

在這些「部立」之中，有關羈旅題材的作品，如眾人所知，皆出自《八代集》之首的《古今和歌集》與最後的《新古今和歌集》之後的《新勅撰和歌集》。從這點來看，若將目光投向《百人一首》中所收錄的羈旅歌的成立背景，便會發現這些作品彷彿經歷了一場橫跨時間與空間的漫長旅程，自《古今和歌集》為起點，穿越其後七部勅撰集，最終抵達《新敕撰和歌集》。

有鑑於此，本研究著眼於上述觀點，對羈旅歌的用語進行探討，以及分析其中所見的修辭技巧，並嘗試解讀其中表現與撰者意識之間交錯所隱含的意義。

關鍵詞：百人一首、定家、羈旅、和歌修辭、撰歌意識

* 輔仁大學日本語文學系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

A Study on the Theme of *Kiryō* in *Hyakunin Isshu* : The intersection with Teika's intentions in poem selection

Yang, Chin-chang*

Abstract

Although *Hyakunin Isshu* is generally attributed to Fujiwara no Teika, scholarly consensus regarding the identity of the compiler and the precise circumstances of its compilation remains inconclusive. Nevertheless, there has been little significant challenge to the editorial principles of selecting a single exemplary poem per poet and arranging the poems in approximate chronological order. Moreover, when examined through the lens of thematic organization (*budate*), *Hyakunin Isshu* largely adheres to the conventions established by imperially commissioned anthologies, comprising primarily of love poems, seasonal poems, poems of parting, travel and exile poems (*kiryōka*), and miscellaneous pieces. The anthology also demonstrates a notable tendency to employ traditional rhetorical devices such as *kakekotoba* (pivot words) and *utamakura* (poetic place names), thereby underscoring its alignment with classical waka poetics.

Among these thematic categories (*budate*), it is noteworthy that the poems on travel and exile (*kiryō*) are all drawn from *Kokin Wakashū*, the first of the Eight Imperial Anthologies (*Hachidaishū*), and from the *Shinchokusen Wakashū*, which was compiled after the last of the Eight Imperial Anthologies, the *Shin Kokin Wakashū*. From this perspective, when we examine the background of the travel and exile poetry (*kiryōka*) included in the *Ogura Hyakunin Isshu*, it appears as though these poems themselves trace a long and distant journey through space and time—from

* Professor , Department of Japanese Language and Culture, Fu Jen Catholic University

臺灣大學學術期刊資料庫

the *Kokin Wakashū* as their point of departure, across the successive seven Imperial anthologies, finally arriving at the *Shinchokusen Wakashū*.

This study aims to focus on these aspects by critically examining the terminology associated with travel and exile poetry (*kiryōka*), analyzing the rhetorical techniques employed in the works, and interpreting the meanings implied at the intersection between poetic expression and the compilers' intentions.

Key words: *Hyakunin Isshu,* Teika*, Kiryō*, Waka Rhetoric, Authorial Intent in Waka Selection

臺灣大學學術期刊資料庫

『百人一首』における「羈旅」の一考察
—定家の撰歌意識との接点—

楊錦昌*

要旨

『百人一首』と言えば藤原定家の撰と一般に考えられているが、撰者や成立に関する問題が十分に解決されているとは言い難い。しかし『百人一首』の各人一首という撰定基準や時代順の秀歌配列については、これまでのところ目立った異論は提示されていない。一方、『百人一首』を部立に基づいて見れば、主に勅撰集の伝統に基づき、恋歌、四季の歌、離別、羈旅、雑歌から構成され、掛詞や歌枕という修辞が多用される傾向があると言える。

これらの部立のうち、羈旅の作品については、それらはいずれも『八代集』最初の作品である『古今和歌集』と、『八代集』最後の『新古今和歌集』よりも遅れて成立した『新勅撰和歌集』から採られたものであることが知られる。この観点から『百人一首』に収められる羈旅の歌の成立背景に目を向ければ、それ自体があたかも『古今和歌集』を起点として後の 7 つの勅撰集を隔てて『新勅撰和歌集』へと至る遥かな時空の旅程を経ているかのようである。

そこで本研究では、こうした点に注目しながら、羈旅歌についての用語を吟味し、作品に見られる修辞技巧に考察を加えつつ、その表現と撰者意識の間の接点に示唆される意味を読み解くことを試みる。

キーワード：百人一首、定家、羈旅、歌の修辞、撰歌意識

* 輔仁大学日本語文学系教授

臺灣大學學術期刊資料庫

『百人一首』における「羈旅」の一考察
—定家の撰歌意識との接点—

楊錦昌

一、始めに

『小倉百人一首[1]』と言えば藤原定家の撰と一般に考えられているが、撰者や成立といった成立論に関する問題が十分に解決されているとは言い難い。例えば、島津忠夫氏が「『百人秀歌』も『百人一首』も定家の撰[2]」とするものの、田渕句美子氏は「『百人秀歌』は定家撰、『百人一首』は定家ではない後人の改編である[3] 」と見る。田渕氏の論点と論集に関しては、東京新聞が「『百人一首』の撰者「定家ではない」論集『百人一首の現在』通説覆す[4]」という見出しで紹介したことにより脚光を浴びるようになった。さらに否定説が定説となることに懸念を持つ吉海直人氏は田渕氏の見解に対して「非定家撰説は決して田渕氏の新説とはいえない[5]」と指摘する。これらの諸点についてはなお検討の余地があるとは言え、しかし『明月記』に「古来人歌各一首[6]」と

---

1 『小倉百人一首』と呼ばれるものは、一般には、定家の別荘である「小倉山荘」で編集が行われたとされる『百人一首』を指すが、「『明月記』ではこの嵯峨山荘は「小倉山荘」とは一度も呼ばれていない」(田渕句美子(2024)『百人一首—編纂がひらく小宇宙』岩波書店、p.102)と指摘されるように、この歌集が必ずしも「小倉山荘」に因む「百人一首」であると断定できるわけではない。関連の著書や論文において単に『百人一首』という表現がしばしば採用されることがあるのも、こうした懸念に基づくものであろう。そのため本論は以下において『百人一首』という通称を用いることにする。

2 島津忠夫(1994)「小倉百人一首の性格—定家の撰歌意識を中心に—」『百人一首と秀歌撰』pp.145-146 風間書房

3 田渕句美子(2023)「『百人秀歌』とは何か」『百人一首の現在』p.28 青簡舎

4 東京新聞(2023)「東京ブックカフェ」『東京新聞デジタル』(https://www.tokyo-np.co.jp/article/225504) 2023年1月16日

5 吉海直人(2023)「『百人一首』の未来—非定家撰説の是非を問う」『古代文学研究 第二次』2023巻32号、pp.33-46 古代文学研究会

6 文暦2年(1235)5月27日の条に、「予本自不知書文字事。嵯峨中院障子色紙形、故予可書由彼入道懇切、雖極見苦事慥染筆送之、古來人歌各一首、自天智天皇以來及家隆雅經」(藤原定家(1978)『明月記』第三、p.465 国書刊行会)という記述がある。ここで触れられている対象が『小倉百人一首』、『小倉山荘色紙和歌』、『百人秀歌』のいずれを指すか必ずしも明確でないものの、『百人一首』の「古来人歌各一首」という原則は貫かれていると言えよう。

臺灣大學 學術研究資源典藏

示されているように『百人一首』の各人一首という撰定基準や時代順の秀歌配列については比較的確かであり、特に疑問が提示されているわけではない。

一方、今回本研究でテーマとする部立について見ると、部立というものは作品論としての一面を有するものであるため、撰者や成立に関する視点から完全に離れて論じることは適切でない。そのため、扱いには慎重さが求められるものの、『百人一首』を部立に基づいて見れば、主に勅撰集の伝統に基づき、恋の歌、四季の歌、離別、羇旅、雑歌から構成され、知的で優麗さを表現する掛詞や縁語という修辞が多用される傾向があると言える。

これらの部立のうち、羇旅の作品については、それらはいずれも『八代集』の最初の作品である『古今和歌集』と、『八代集』より遅れて成立した『新勅撰和歌集』から採られたものであることが知られる。この観点から『百人一首』に収められる羇旅の歌の成立背景に目を向ければ、それ自体があたかも『古今和歌集』を起点として後の 7 つの勅撰集を隔てて『新勅撰和歌集』へと至る遥かな時空の旅を経ているかのようである。そこで本研究では、こうした点に注目しながら、羇旅の歌に認められる修辞技巧や表現および藤原定家の撰歌意識に分析を加える。具体的には、先ず羇旅（歌）についての用語を吟味し、作品に見られる修辞技巧に考察を加えつつ、作品に通底する撰者意識を読み解くことを試みる。

そこで、あらかじめ羇旅（歌）に触れた先行研究について管見の及ぶところを概観すれば、「万葉羇旅歌論[7]」や『万葉集羇旅歌論[8]』は主に『万葉集』をめぐって羇旅歌を論じるものであり、また「八代集離別歌羇旅歌考[9]」、「關于八代集羈旅歌的考察—以『新古今集』爲中心—[10]」、「「古今和歌集」羇旅歌巻の成立—遣唐使と紀氏[11]」、「『新

[7] 梶裕史（1988）『三田國文』9-6、pp.1-15　慶應義塾大学国文学研究室
[8] 関谷由一著（2021）『万葉集羇旅歌論』北海道大学出版会
[9] 村瀬憲夫（1994）『文学・芸術・文化 : 近畿大学文芸学部論集』6-1、pp.1-14 近畿大学文芸学部
[10] 陳錦清（2014）『臺大日本語文研究』28、pp.1-15　台湾大学日本語文学系
[11] 蔵中進（1986）『文学』54-2、pp.152-166　岩波書店

臺灣大學圖書館期刊資料庫

古今集』の羈旅歌二首試解―「言問へよ」と「宿問へば」[12]」、「旅寝の夢 その 1：勅撰集羈旅歌の類型[13]」等の論考は『八代集』とそれに続く作品（『古今和歌集』、『新古今和歌集』及び『勅和歌撰集』等）に着眼するものである。さらに「羈旅について[14]」、「羈旅歌の成立―人麻呂羈旅歌八首をめぐって[15]」、「実詠から題詠へ:羇旅歌の変容をめぐって[16]」、「旅人のいる風景―羈旅歌の変遷をめぐって―[17]」、「柿本人麻呂「羈旅歌八首」の位置：〈羈旅〉主題化の始発[18]」等は羈旅歌全体やその変遷及び人物との関係を考察するものである。このように、『百人一首』所収の「羈旅歌」そのものを専ら主題として考察の対象にした先行研究は特に見当たらず、わずかに注 17 に示した安田徳子の論考や関幸彦の著書『百人一首の歴史学[19]』に断片的に扱われるに留まる。こうした点において、本研究は『百人一首』の「羈旅歌」を考察の対象として扱い、その表現と撰者意識の間の接点の示唆を読み解こうとする新しい試みである。なお、本論においては、論述部分には原則として新字体を用いる。一方、注記および参考文献においては、出典や出版社の表記に準拠するものとする。

二、羈旅と羈旅歌

（一）羈（羇）・旅の字義

『万葉集』や柿本人麻呂などの上代作品は中国文学の影響を大きく受けていることが知られるだけに、漢語由来の「羈旅（歌）」という語の本来の用法を先ず確認することが欠かせない。そこで分析を

[12] 中川博夫（2009）『国文鶴見』43、pp.1-7　鶴見大学日本文学会
[13] 今関敏子（2006）『川村学園女子大学研究紀要』17-2、pp.194-184　川村学園女子大学
[14] 今井福治郎（1954）『国文学:解釈と鑑賞』19-4、pp.39-42　至文堂編
[15] 大浦誠士（1997）『上代文学』78、pp.50-65　上代文学会
[16] 安田徳子（1991）『国語国文学』10、pp.1-15　聖徳学園岐阜教育大学
[17] 安田徳子（1988）『名古屋大学文学部研究論集：文学』34、pp.201-213　名古屋大学文学部
[18] 関谷由一（2013）『国語国文研究』144、pp.14-31　北海道大学国語国文学会
[19] 関幸彦（2021）『百人一首の歴史学』p.18　吉川弘文館

臺灣大學博碩士論文期刊資料庫

進めるに先立って、まず中国と日本の羈旅および羈旅歌についての用語としての意味を確認しておくことにする。

羈旅は、文字通り、羈（羇）と旅の二つの漢字から成り立つものである。『教育部　異體字字典[20]』によると、羈は羇と同じ音と義を持ち、羇は羈の異体字であるとされる。羇の字義については、同字典では主に「馬絡頭（おもがい、たづな）」、「寄居（寄留する）、作客（滞在する）」、「旅居外地之人（旅人）」の三つが挙げられている。これは、中国古典における用法の字義と差異はない。例えば、『廣韻・上平聲・支・羈』に示されるように、「羈：馬絆也，又馬絡也。」、「羇：寄也。」[21]とあり、おもがいや、たづなを繋ぐことを意味する。また「羇、寄なり」と解され、一時的に身を他郷に寄せる寄宿、寄留、仮住まいといった意味を持つ。ここには、主体としての故郷（自分、旅人）と客体としての異郷（旅先）、そして「羈：馬絆也，又馬絡也。」によって示される、主体と客体を繋ぐ絆の三つの側面を見て取ることができる。

また、羈の異体字の羇の字義について、『康熙字典・网部・十七』には「羇：《廣韻》《集韻》《韻會》《正韻》居宜切，音羈。旅寓也。《玉篇》寄也。[22]」とあり、羇は羈と同じ発音であり、羈と同じく旅先を意味する「旅寓」や、一時的に身を託して他の土地に住むことを意味する「寄」の意味も示される。ただし《康熙字典·网部·十七》羇と、《康熙字典·网部·十九》羈の二つを比べてみると、羇のほうがより一層旅との関連が深く感じられる。この点は、日本文学の世界で常用される「羈」とは些か異なる。因みに「寄」には「寄雁伝書」、「寄海伝情」の例のように、ある手段に託して恋しい故郷や愛しい対象に旅情を伝える望郷的な意味も潜んでいる。

---

20 https://dict.variants.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=67300（B03531 羇說）

21 https://ctext.org/text.pl?node=289223&if=gb#n289226（『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』による）

22 『諸子百家　中國哲學書電子化計劃　康熙字典：頁 950 第 26』（https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E7%BE%87）

臺灣人學術期刊資料庫

一方、旅の字義について見れば、『康熙字典・方部・六』においては、「《説文》軍之五百人爲旅。（中略）又《博雅》旅。客也。《易·復卦》商旅不行。又《旅卦疏》旅者，客寄之名，羈旅之稱，失其本居而寄他方，謂之爲旅。[23]」とあるように、軍の 500 人を旅として構成する単位を示す他に、旅が客であること（旅。客也）、そして「客寄」や「羈旅」のように、その本居地を失い、他方に仮住まいをすること（失其本居而寄他方）を意味する。さらに『周易集解』巻十一「旅卦」第五十六[24]には以下の注釈がある。

《序卦》曰：窮大者必失其居，故受之以旅。　崔憬曰：諺云：作者不居，況窮大甚，而能久處乎？故必獲罪去邦，羈旅於外矣。

下線によって示した部分は、「必ず罪を獲り、邦を去り、外を彷徨って羈旅することになる」という意味である。ここで述べられる旅は、罪に問われ、国から追放され、異国に流浪する「羈旅」に繋がるものである。

（二）羈旅・羇旅の意味

以上に述べた羇（羈）と旅の二つの漢字を組み合わせた羇旅（羈旅）はいかなる含意をもつのであろうか。前述した『康熙字典』には、その网部・十七に「《周禮·地官·遺人》野鄙之委積，以待羇旅。《註》羇旅，過行寄止者[25]。」とあり、過ぎ行きて寄り留まること（過行寄止者）を注として補足し、旅先などに身を寄せるという意味を示すとする。また『楚辭　九辯』には「廓落兮，羈旅而無友生[26]」とあるように、友なく一人で旅する寂しさを表現する用法も見られる。これらの例はいずれも故郷を離れて孤独に旅路をたどるイメージを強く帯びる。

---

23 『諸子百家　中國哲學書電子化計劃　康熙字典：頁 483 第 02』（https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E6%97%85）

24 易学網による（https://www.eee-learning.com/book/533）

25 『周禮・地官・遺人』「野鄙之委積，以待羇旅」に見られる羇旅について、漢の鄭玄が「羇旅，過行寄止者。」と注釈している。

26 『諸子百家　中國哲學書電子化計劃　楚辭:九辯』(https://ctext.org/chu-ci/jiu-bian/zh)

臺灣大學學術期刊資料庫

一方、『左傳』「莊公二十二年[27]」には、以下のような記述がある。

春，陳人殺其大子御寇，陳公子完與顓孫奔齊，顓孫自齊來奔。齊侯使敬仲為卿，辭曰：「羈旅之臣，幸若獲宥，及於寬政，赦其不閑於教訓，而免於罪戾，弛於負擔，君之惠也。

また、『六臣注文選』巻 45 は、班固の『漢書』「敘傳上[28]」の「亡命漂說，羈旅騁辭」に関して以下のように注する。

善曰項岱曰委君之徒謂之亡命謂亡君命也。左傳陳敬仲[29]曰羈旅之臣杜預曰羈寄也旅客也。志濟曰亡命謂棄君命而外游者也。羈旅謂客游不得也。（下線及び句点は筆者による。）

これらに基づけば、「羈旅」について、李善注の「左傳陳敬仲曰羈旅之臣」は、『左傳』の「齊侯使敬仲為卿，辭曰：「羈旅之臣，幸若獲宥（後略）」という言説と間テクストの如くに繋がっている。つまりこれらの「羈旅」は「羈旅之臣」のことであり、いずれも単に旅人や旅客の意味のみに止まるのではなく、罪を犯し国や君主から離れて旅先を彷徨する罪人の意味を持つ。言い換えれば、これらの「羈旅」には前述した『周易集解』の注に示される羈旅する罪人・流人の意味も含まれる。また、歐陽脩〈梅聖俞詩集序〉にある「以道羈臣寡婦之所嘆，而寫人情之難言」に見られるように、遥かな異郷に流された臣下を指して「羈臣」という例もある。以上の例には、「羈：馬絆也，又馬絡也。」とあるような、旅先に居ておもがいやたづなに繋がれ、故郷に帰らんとしつつも帰ることの能わない意味が含まれる。したがって、「羈旅」という語は、しばしば故郷で罪を得たがゆえに異郷を漂泊する罪人の旅を指す含意を持つと言えよう。

一方、日本古典における羈旅・羇旅について見ると、『萬葉集』巻十七に収録される雑歌・大伴家持作歌十首（第 3890～3899 首）に、「天平二年庚午冬十一月，大宰帥大伴卿被任大納言。上京時，傔從

27 『數位經典』による（https://www.chineseclassic.com/13jing/zoezuan/ch03_22.htm）

28 『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』（https://ctext.org/han-shu/xu-zhuan/zh）

29 『左傳』二十二年，春，陳人殺其大子御寇，陳公子完與顓孫奔齊，顓孫自齊來奔。齊侯使敬仲為卿，辭曰：「羈旅之臣，幸若獲宥，及於寬政，赦其不閑於教訓，而免於罪戾，弛於負擔，君之惠也。

臺灣大學圖書館

人等別取海路入京。於是悲傷羈旅，各陳所心，作歌十首[30]」とあるように、早くも『万葉集』の時代にその用例を見ることができる。ここには「海路入京（海路を取りて京に入る）」、「悲傷羈旅（羈旅を悲傷し）」、「各陳所心（各々思いを陳べて）という羈旅・羈旅における感懐が述べられている。この点に関して、『日本国語大辞典[31]』では、「(「羇」「羈」ともにたびの意）たび。旅行。また、和歌、俳句の部立ての一つで、旅情を詠んだものを示す語として用いられている。」と解説され、以下のような6つの用例が取り上げられている[32]。

作品	用例
①万葉集〔8C後〕五・八六四右詞文	羈旅辺城懐古旧而傷志〈吉田宜〉
②本朝文粋〔1060頃〕一〇・過参州薬王寺有感詩序〈慶滋保胤〉	余是羈旅之人。牛馬之走。
③済北集〔1346頃か〕一〇・一山国師行状	召師補南禅之欠。師老艱于羈旅。
④三体詩素隠抄〔1622〕二・三	羈旅の身なれば、何事につけても惆悵となげくばかりぞ
⑤俳諧・奥の細道〔1693～94頃〕飯坂	羈旅辺土の行脚、捨身無常の観念、道路にしなん是天の命なりと、気力聊とり直し
⑥春秋左伝-荘公二二年	羈旅之臣、幸若獲宥、及於寛政

ここに示された用例を見ると、中国の古典作品の⑥を除き、日本の古典作品において描かれている羈旅は、動詞（①、⑤）や動作性名詞（②、③、④）として使われている。用例を具体的に見れば、辞書の解説の通り、主に「たび、旅行」そのものを表す例もあるが、①の「懐古旧而傷志」及び④の「惆悵となげくばかりぞ」に示され

[30] 「天平二年庚午の冬十一月、大宰帥大伴卿、大納言に任ぜられ、京に上る時に、僚従の人等別に海路を取りて京に入る。ここに羈旅を悲傷し、各所心を陳べて作る歌十首」【小島憲之、木下正俊、東野治之（1996）『新編日本古典文学全集 9 萬葉集 4』p.145　小学館】

[31] Japan Knowledge に収録されているものによる（https://japanknowledge-com.eu1.proxy.openathens.net）

[32] 表と下線は筆者による。

臺灣大學學術期刊資料庫

るように、『萬葉集』巻十七と同じく旅情や個人の感懐を示す例もある。また、②の「羈旅之人」と④の「羈旅の身」は、⑥の中国の『春秋左伝』に見られる「羇旅之臣」と同じ表現形式である。とは言え、日本古典において羈旅という語の修飾を受けるのは「人」や「身」などの個人的な立場を示す語であるが、一方、中国古典の用例では羈旅は「臣」などの政治的な立場を示唆する語と共起する。このように、羇旅・羈旅という語には、国や主君から離れて異郷に配流される旅程としての政治的なイメージも含まれる。

（三）羈旅歌の定義

ここでは、今回考察の対象とする羈旅歌についての検討を行う。羈旅歌の最も早い例は、『萬葉集』巻三や巻十二に収録される「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首[33]」（第 249～256 番の八首）及び「羈旅發思[34]」（第 3127～3179 番の五十三首）に見い出すことができる。巻三 249 番の「三津の崎波を恐み」や 250 番の「夏草の野島の崎に船近付きぬ」では旅路の風景を通じて作者の所感が表現され、251 番の「浜風に妹が結びし紐吹き返す」では些か恋歌にも似た望郷が詠まれ、252 番の「すずき釣る海人とか見らむ旅行く我を」では豊かな旅情が示される。このようにこれらの作品は、全体として旅情や風景を詠じる傾向を持つ。「柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首」の羈旅については、注 33 で示したテキストの頭注に「「羈」は「寄」に通じ、旅に同じ。タビとも読むが、音読する。」とされ、「羈」には旅先の土地に身を託して住むという「寄」が持つ意味の他に、旅（旅先）を意味するとも述べられる。一方、巻十二の「羈旅發思」ではその詠題のとおり、旅情を詠うものではあるが、注 34 のテキストの頭注では「「羈」は旅の意。旅先で詠んだ恋の歌。」とされ、恋の歌である羈旅歌をも意味する。このように旅先で旅情を詠じた作品はもとより多いが、

[33] 小島憲之、木下正俊、東野治之（2006）『新編日本古典文学全集 6　萬葉集 1』pp.173-175　小学館（1994 年 9 月 10 日第一版第 1 刷発行）
[34] 小島憲之、木下正俊、東野治之（2006）『新編日本古典文学全集 8　萬葉集 3』pp.359-371　小学館（1995 年 12 月 1 日第一版第 1 刷発行）

臺灣大學圖書館典藏

羈旅歌が部立としてまとめられるようになったのは、最初の勅撰集である『古今和歌集』以後のことだと思われる。

因みに、羈旅歌について一般の辞典においてそれがどのように扱われているかについて、以下に概観してみよう。『和歌文学辞典』[35]では「旅中での風物や、それに接した折の体験・感情を詠んだ歌。」と述べられており、『精選版 日本国語大辞典』には、「旅に関する感懐を詠んだ和歌。和歌の部立ての一つとしても用いる。」と解説されている。また、『改訂新版　世界大百科事典』においては、「旅に触発された種々の感情を主題とする歌。」と記されている。こうした見解をまとめれば、羈旅歌とは旅に触発された体験・感情、感懐を詠んだ和歌のことだと言えよう。この観点に基づきながら羈旅の歌の作風について目を向ければ、『改訂新版　世界大百科事典』は、「現実の旅の経験を離れ，歌枕のイメージに依存した観念的な詠みぶりも見られるようになる」と指摘する。

このように羈旅歌は旅路の風景に触発された旅情を歌うものであるだけに、それに伴う各地の地名が作品に詠み込まれると、歌枕としての表現効果が発揮される。そこで小論は、まず羈旅歌に詠み込まれた歌枕という修辞に注目しつつ、二の（一）において既述した、主体としての故郷（自分、旅人）、客体としての異郷（旅先）、そして主体と客体を繋ぐ絆の三つの側面に注目しながら、以下に考察を進めることとする。

三、『百人一首』における羈旅歌の修辞

『百人一首』の部立を見て分かるように、百人一首に撰入されている羈旅歌は 4 首あり、それを歌番号で示すと第 7 番、第 11 番、第 24 番、第 93 番である。このうち、第 7 番、第 11 番、第 24 番の 3 首が『八代集』の最初の作品である『古今和歌集』に勅撰されたものである。一方、第 93 番は第三代将軍源実朝による私家集『金槐和歌

[35] 有吉保（1991）『和歌文学辞典』桜楓社

臺灣大學學術期刊資料庫

集』に収められたものであるが、『八代集』より遅れて成立した『新勅撰和歌集』に定家によって撰ばれた作品である。以下にこれらの４首を示す。引用にあたっては『新編日本古典文学全集』11 の『古今和歌集』と、同 49 の『中世和歌集』「金槐和歌集　雑部」に基づく。

番号	テキスト	頁数
7	天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも	172
11	わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟	173
24	このたびは幣もとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに	181
93	世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも	108

（一）第 7 番の安倍仲麿の羈旅歌

『百人一首』第 7 番は、「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」という羈旅歌である。これは、『古今和歌集』巻 9 羈旅歌の部の巻頭に置かれている安倍仲麿作の和歌が撰入されたものである。「唐土にて月を見てよみける」という題詞が付されているように、この歌は、唐土の中国で月を見て詠み上げた羈旅歌である。つまり、『古今和歌集』406 番の左注に示されるように、作者の安倍仲麿が遣唐使[36]として羈旅先の唐土に長く滞在した後にようやく日本へ帰国できるようになった折り、餞別の宴が催された明州の海辺で詠んだ羈旅の歌である。同歌は、『和漢朗詠集』の第 258 首[37]にも収録されている。

管見の及ぶところでは、『百人一首』第 7 番の修辞については特に注目される見解が示されたことはなく、また「句切れなし」として説明されることが一般的である。しかしこの歌では、「天の原」、「春日」・「三笠の山」（春日なる三笠の山）、「月」など[38]、場所や空間と

[36] 『續日本紀』に、「宝亀八年（七七七）二月戊子【癸未朔六】○二月戊子。遣唐使拝天神地祇於春日山下。去年風波不調。不得渡海。使人亦復頻以相替。至是副使小野朝臣石根重脩祭祀也。」とある。この記述は和歌の 3、4 句の「春日なる三笠の山に」の表現と重なるように思われる。

[37] 菅野禮行（1999）『新編日本古典文学全集 19　和漢朗詠集』p.142　小学館

[38] 天の原、春日・三笠の山、月の四語は、いずれも久保田淳、馬場あき子（2014）OD 版『歌ことば歌枕大辞典』KADOKAWA に歌枕として収録されている。

臺灣大學圖書館

深く結びつく関連詞が多用される。つまり、この羈旅歌において空間として詠み込まれた「天の原」、「春日」、「三笠の山」、「月」は、いずれも歌枕と言えよう。

初句の「天の原」は、天つ神が住む天上界をイメージさせることにより、果てしない大空を表現するものである。3 句と 4 句の「春日なる三笠の山」[39]は、修飾語（春日なる）と被修飾語（三笠の山）の組み合わせによって構成された句であり、「三笠の山」の麓にある奈良の春日大社を詠みながらも、全体の焦点を安倍仲麿の故郷である「三笠の山」に集中させている。これにより、日本を出発する折りに羈旅の安全を祈ったことを懐かしく思いつつ、容易に帰国できなかった悲哀感を望郷の心情に重ね合わせたものとして効果的な表現がなされている。また、海辺で見た月が美しく冴えわたっていることから、この歌が詠まれた時節は望月の頃前後であったと推測できると同時に、宇宙にある月世界をも連想させられる。

このように、歌枕が効果的に構築されたこの羈旅歌においては、「唐土」→「天の原」→「春日」→「三笠の山」→「月」→「唐土」というイメージの脈絡の中で、視点を広い世界に向けた後にそれを狭い空間に収斂させ、その後に狭い空間から再び視点を広げることによって、望郷の対象に焦点を結ばせるという構図が認められる。つまり、天上から地上へと視点を集中させつつ、遠くから近くへと焦点を移動させ、特定の対象に目を向けた後、再び遥かな異郷の唐土へ視点を戻すという技巧が用いられ、構図を循環させることによって、望郷の念がいよいよ高められるという効果が期待される。この技巧は、言い換えれば、視覚によって触発された心の動きの構図が人間界の上にある広々とした果てしない宇宙（天の原）から、地上にある懐かしい故郷（春日なる三笠の山）を経て、再度「春日なる三笠の山」「春日なる三笠の山に出でし月かも」によって示される

[39] 注 38 の『歌ことば歌枕大辞典』には、春日について、「大和国の歌枕（中略）春日山をとりまくかなり広い範囲の山裾の野が春日野と呼ばれた。春日山は花山、若草山、三笠山などの、春日大社の背後に連なる山全体を称する。その中心は春日なる三笠の山であるが…。」（pp.223-224）と解説されている。

臺灣大學圖書館

空間に戻るという修飾が重ねられ、故郷の「三笠の山」から「天の原」にある「月」に向けて再帰的に徐々に焦点が絞られる。さらに、「ふりさけ見れば」という句に用いられる「さけ」は、「離け、割け、裂け」を連想させるだけに、家族や故郷を離れて異郷の唐土にいる寂寞感や悲哀感によって触発される望郷の心情をますます高める効果を持つ。同時に、「月」は、第二章の（一）で考察したように、手綱を繋ぐ羈・羈旅の意味を示す趣と同じく、「遠く時と所を隔てた場をも結びつけるのである」[40]という意味合いも示されるものであり、客体としての異郷の唐土と主体としての故郷の「春日なる三笠の山」を絆によって結び留めるものでもある。

また全体に目を向けつつあらためてこの作品を見れば、この歌は体言である「月」に視点をシフトさせたまま終始する「句切りなし」で詠まれているものであると言える。

以上の観点による歌意に基づきつつ、この「句切りなし」の作品を、筆者なりに以下に現代語訳で示しておく。

> 異国の唐土で果てしない夜空を見渡すと、美しく冴えている月が出ているが、あれは、遥かにある我が故郷の春日の三笠の山に出ていた月と同じなのだなあ。

（二）第 11 首の参議篁の羈旅歌

次は、「わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ海人の釣舟」（小野篁朝臣）という第 11 番についてである。この羈旅歌は、漢学者の参議篁が遣唐使を辞退した政治的な事件によって隠岐の国（島根県）に流罪される時に詠まれた歌であり、本来は、『古今和歌集』第 407 番（巻 9・羈旅）に勅撰されたものである。この作品についても筆者による現代語訳を以下に示しておく。原文では、「海人

---

40 「月」について、『歌ことば歌枕大辞典』pp.561-562 では「月は、旅路を照らし出しもする。題でいえば旅宿月などである。安倍仲麻呂が唐土で詠んだ「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」（古今集・羈旅・四〇六）を見てもわかるように、月は遠く時と所を隔てた場をも結びつけるのである。（中略）月は我々をこの世ならぬ世界へといざなう。」と解説されている。

臺灣大學學術期刊論文

の釣舟」が尾句に倒置されているが、それを首句に移すことによって呼び掛ける対象を直接に提示した。

海人の釣舟よ。数多くの島々を渡って、舟を漕ぎ出してしまったと、都にいる恋しい人には告げてくれ。

この句の「八十島かけて漕ぎいでぬ」について、「漕ぎ出して行った[41]」と解釈される場合が多いが、「漕ぎいでぬ」という動詞の「いでぬ」の終止形は、「出づ」であり、「出る」や「出発する」ことを意味し、ここには移動動詞の「行く」が使われていない。また、完了を表す助動詞の「ぬ」については、恋しい人に伝えてもらう場合、「た」「〜てしまう」より事実の確定を表す「〜てしまった」の方がふさわしいため、「舟を漕ぎ出してしまった」と訳した。こうして、確定した事柄を表すものとする読みを採用することによって、羈旅の行き先に広がる茫々たる大海原の風景によって象徴される未来への不安とわが身の悲哀感が表現されると言えよう。

これらの「羈旅」は、本論の第二章の（一）の『周易集解』の「故必獲罪去邦，羈旅於外矣」と、同（二）の『左傳　莊公二十二年』に見られる「羈旅之臣」、そして『漢書』の「亡命漂說，羈旅騁辭」のように罪に問われて異郷に流される拘束を伴う羈旅（羈留）の趣に相通じるものがあると思われる。

また、この歌について、関幸彦氏が、『百人一首の歴史学』「小野篁の意地」において以下のように評価している。

歌意分明で韻をふんだ懸詞などはなく、漢学に長じた篁のセンスが見える。唐の文物を摂取しつづけていた平安初期ならではの気分が滲んでいる。雄壮さのなかに悲愴さがある。（p.134）

氏が述べるように歌意が十分に明らかな上に、「雄壮さのなかに悲愴さ」が示されている。ここでは修辞技法としての掛詞が生かされていないものの、擬人法、倒置法、四句切れ、体言止めといった技

[41] 有吉保（2024）『百人一首　全訳注』講談社（1983 年 11 月　第 1 刷発行）

臺灣大學學術期刊資料庫

法が効果的に採用されており、それぱかりでなく、「わたの原」「八十島」という歌枕も使われている。

擬人法、倒置法、体言止めの三つの技法を、眼前に見える光景である「海人の釣舟」という句に連結させることにより、余情と余韻がそこに集約され、小野篁の孤独や悲哀の心情が効果的に表現されている。この点について注 41 の編者有吉保氏の以下のような解説は大いに首肯されよう。

> 釣舟を擬人化し、「釣舟」にまで訴えかけずにはいられないという孤独な気持を詠んでいる。一首に不安・孤独・絶望・悲哀の心情を直接に表現せず、都に残した女性への慕情を詠むところに、逆にかえって哀切感が深められている。(P.57)

一方、歌枕に因む「わたの原」と「八十島」について目を向けると、これらはともに『能因歌枕』(廣本)[42]に記載される歌枕である。「わたの原とは、しほうみをいふ、おしてるやとも。」とあるように、海の原や潮海・塩海のことで、海(わたつうみ)を意味するものである。『歌ことば歌枕大辞典』[43]には、「わたつうみ」について、「「わたつみ」が本来の形。「わた」は海のことで(中略)「わたの原」といえば大海のこと。」と解説されている。一方、「八十島」については、「多くの島(中略)上代から海路の船旅の歌に用いられている。」と述べられている。またその後に『百人一首』11 番に撰入された『古今和歌集』第 407 番を付け加え、「以後の「八十島」の歌の多くがこの篁の詠を念頭に置いている」とも解説されている。そして、最後に『能因歌枕』の記載と同じく「八十島」は出羽国の歌枕として詠まれたと付け加えられている。

このようにここに採用されている修辞技法の観点に基づきつつ、あらためてこの作品を観察すれば、広々とした大海、大海原の中で眼前に浮かぶ島々、そして島々を縫うように漕ぎ行く小舟(釣舟)、罪に問われ、故郷を離れて異郷を流離する流人(歌人)としての小

[42] https://saigyo.sakura.ne.jp/noinutamakura.html による。
[43] 注 38、p.984。

臺灣大學學術期刊資料庫

野筥という要素が互いに表現効果を高めあっている構図が見えてくる。こうした技巧には『百人一首』第 7 番の作品に通じる要素があり、すなわち先ず全体像を描き出し、そこで示唆される要素を連想の糸で結びつけ、最後には焦点を一つの点に帰着させていく。つまり、ここでは詠歌の対象物に対して視点やその範囲を連綿と変化させるパターンを応用することによって効果が高められている。歌意に照らして見れば、詠み手の視野を、まず大海（わたの原）という全体を広いアングルで捉え、遥か大海に点在する島々（八十島）から眼前に見える海人の「釣舟」へと焦点を移すことにより、遠近法を活用した作品世界を構成することに成功している。それによって、客観的な視点からこの構図を見つめている歌人は、大海を漕ぎ行く旅路や流人としての羈旅先への不安、そして京にいる人への恋慕と孤独の心情までをも見事に詠み上げている。この時、ここで仲介役として機能するのは八十島である。これによって、撮影用のカメラが全体の視野をロングで撮りつつズームインしながら細部に焦点を絞っていく過程が読者の眼前に再現される。また、客体としての異郷（羈旅先）は、隠岐国に連なる大海の中で波間に揺れ動く島々である。一方、主体としての故郷の代表は人である。そして、たづなを繋ぐように主体と客体を結ぶのは、海人の「釣舟」であり、それが旅人の孤独感・悲哀感・望郷の情を触発する。こうしてこの作品は、第二章の（三）で述べた「旅に触発された種々の感情を主題とする」羈旅・羇旅、羈旅歌へとシフトする。

（三）第 24 首の菅原道真の羈旅歌

次に「このたびは幣もとりあへずたむけ山紅葉の錦神のまにまに」という第 24 番について考察する。この歌は前章で取り上げた作品と同じく平安時代前期の羈旅歌である。作者は、学問の神様として知られている菅原道真である。道真は和歌や漢詩に優れた才能を発揮し、右大臣にまで出世したものの、藤原時平の陰謀により冤罪を受けて大宰府に左遷された人物である。第 24 番の詞書に「朱雀院の奈良におはしましたりける時に手向山にてよみける」とあるように、

臺灣大學學術期刊資料庫

この歌はすがはらの朝臣（菅原道真）が宇多上皇[44]の御幸に同行した時に詠み上げた歌である。一見すると羈旅歌には見えないように思われるが、冒頭の掛詞に「このたびは」と詠まれていることから、御幸、外出という移動の行為が旅の範疇に属するものと見なされる。とは言え、この作品が内包する風景と雰囲気は、前述した 2 首の羈旅歌と同質ではない。

この和歌の出典は、『古今和歌集』第 420 番（巻 9・羈旅）である。詞書に記される宇多上皇の御幸の際に詠まれた作品であることを踏まえつつ、呼び掛けられる対象を手向山の神として、その歌意を示しつつ、現代語訳したものを以下に示す。

> このたびの御幸の旅は、あまりにも急なことなので、前もって幣も用意できなかった。神様よ。どうぞこの手向山の紅葉を御心のままにお受け取りください。

この作品の修辞について見れば、先ず掛詞の使用に目が向けられる。つまり初句の「このたびは」のたびは、旅、度との掛詞であり、この旅とは、今回の旅行を表す。またこの作品にはさらに歌枕や見立ての技巧も見られる。ここでの歌枕とは、たむけ山（手向山）であり、「旅の安全を祈って峠の神に幣を手向ける山をいう[45]」。さらに「幣もとりあへず」という表現によって、道祖神（峠の神）へ献ずべき幣も用意できなかった蒼惶さと、「紅葉の錦神のまにまに」とあるように、眼前の手向山の紅葉を幣として捧げようとする機知が示されている。ここでは紅葉の錦を幣に擬すという見立ての修辞技法が秀逸である。また、幣が紅葉の縁語として機能しつつ、紅葉も錦の縁語として機能していると見えないわけでもない。

---

[44] 宇多天皇について、『日本紀略』「後篇第一 醍醐天皇」（黒板勝美編（2004）『新訂増補国史大系』第 11 巻、pp.1-30　吉川弘文館）に、亭子天皇宇多、宇多帝、太上皇宇多、太上天皇宇多、太上法皇宇多、法皇宇多、禪定法皇宇多、宇多院、宇多仙院といったさまざまな呼称があるが、『古事類苑』「帝王部/太上天皇〈追尊天皇附〉　（https://ys.nichibun.ac.jp/kojiruien/）」においての『日本紀略』「一醍醐」にある、「昌泰二年十一月廿五日乙卯、詔停二朱雀院太上天皇〈〇宇多〉之尊號一」という記述からの影響であろうか、「朱雀院太上天皇」という名称でも呼ばれている。

[45] 注 38、P541。

臺灣大學學術期刊資料庫

こうした点に基づいてこの歌を鑑賞すれば、この第 24 番の作品には、手向山、幣（紅葉、錦）、神の三者が緊密な関係を保持しながら効果的に表現されている構図が見える。この三者において、異郷（旅先）である客体になるのは手向山であり、故郷である主体になるのは自分が任官する京都であり、旅の安全を見守ってくれるのが峠の神や道祖神である。ここで主体と客体を繋ぐのは、幣として手向けられる錦としての紅葉であり、同時に、視点が眼前に見える紅葉から目に見えない神へと移行することによって、移ろいゆく視点の奥深さが表現される。こうして旅の触発を受けることにより、それらが宇多上皇宮滝御幸の際の安全を祈る菅原道真の心情表現に相通じ、羈旅歌としての感慨がいよいよ深められることとなる。

（四）第 93 番の源実朝の羈旅歌

次に扱うのは、「世の中は常にもがもな渚こぐあまの小舟の綱手かなしも」という『百人一首』第 93 番の歌である。この歌は、前の 3 作品と異なり、鎌倉時代初期の作品であり、源実朝によって詠まれた羈旅の歌である。源実朝は、藤原定家に和歌を学んだ天才歌人であり、12 歳で鎌倉幕府第三代将軍となった人物として知られている。幕府での権力争いの中で複雑な政治の世界に翻弄され、28 歳の若さで甥の公暁によって暗殺された。

この『百人一首』の第 93 番の歌は出典が『新勅撰和歌集[46]』であるが、実朝によって編された自撰歌集『金槐和歌集』に収められている歌でもある。この歌には実朝が権力闘争の中で抱いた感慨が示されており、世の中の無常を嘆く悲哀感が読み取られるとともに、永遠に変わらないものへの思い（常にもがもな）と、漁師の小舟が綱手を引く刹那的な風景（あまの小舟の綱手）が対照的に描かれている。筆者の現代語訳を以下に示す。

[46] 『新勅撰和歌集』羈旅・525。

臺灣大學學術期刊資料庫

世の中は永遠に変わらないままでほしいなあ。渚を漕いでいく漁師の小舟の綱手を引く風景が心に沁み込んでいくのはなんとも言えないことよ。

この作品には、本歌取り、二句切れという修辞技法のほかに、世の中、渚、海人、綱手という歌語も取り入れられている。二句切れに関わる第二句の「常にもがもな」には本歌があり、以下の①に示した『萬葉集』巻一の作品がそれである。『萬葉集』の本歌は、美しい乙女がいつまでもそのままであってほしいと述べるものであるが、実朝にとっては、世の中の安穏や平和が永遠に続くようにという願いを託した表現でもあろう。「世の中は常にもがもな」という和歌の表現形式の中心とも言うべき切れ字の部分は、複雑な政治の世界に翻弄され、苦悩の中に沈潜する実朝の心情と願いを仄かにありのままに込めて描いているのではなかろうか。

①河上のゆつ岩群に草むさず常にもがもな常娘子にて（『萬葉集』[47]・巻一）

②陸奥はいづくはあれど塩釜の浦こぐ船の綱手かなしも（『古今和歌集』[48]東歌・陸奥歌）

さらに、実朝の「渚こぐあまの小舟の綱手かなしも」の句にも本歌があり、それは上に示した②『古今和歌集』東歌・陸奥歌である。実朝の作品と古今和歌集の作品の両者を比べてみると、浦と渚、そして船と小舟の違いがあるが、「塩釜の浦」のように場所が明らかである本歌と異なり、実朝の作品ではあま（海人）という海の情景に溶け込みやすい対象が選ばれており、歌人の個人としての願いや心情が巧みに浮き彫りに表現されている。つまり、本歌の「塩釜の浦こぐ」の修飾対象が船であるのに対し、本歌取りの「渚こぐ」の修飾対象は海人である。「浦こぐ」と「渚こぐ」の表現の違いに目を向ければ、入り江や浜を意味する浦と、波打ちぎわを表す渚の差異が

[47] 小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳（1994）新編日本古典文学全集 6『萬葉集』小学館
[48] 小沢正夫、松田成穂校注・訳（1994）新編日本古典文学全集 11『古今和歌集』小学館

臺灣大學學術期刊資料庫

あり、本歌の「塩釜の浦こぐ船」が平穏でゆったりと船を浮かべるイメージを示す一方で、本歌取りの「渚こぐあまの小舟」には、一隻の小舟が頼るすべもなく渚を漕ぎ行くイメージが伴う。これは、藤原定家の弟子としての実朝が師匠の定家から求められた「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿を願ひて[49]」という理念に従いつつ、本歌取りの技巧を採用することで新しき心を示そうと試みた姿を映すものであろう。

この作品の第5句の「かなしも」について、「景観へのしみじみとした興趣、漁夫の生活への共感、無常感を込めた哀感などの諸解がある[50]」とされる。一隻の小舟で渚を漕ぎ行く海人の姿と、たづなによって導くかのように綱手を引く風景には、複雑な権力闘争に直面している実朝の不安が象徴されており、上の句に詠み込まれた二句切れの「世の中は常にもがもな」によって、社会が安穏と平和の方向へと導かれることを願う心情が詠み込まれている。もとより、世の中、渚、海人、綱手という歌語自体がこころもとない詠み手の心情を示すものであると言えよう。

前述した主体、客体、そして主体と客体を繋ぐ絆の三つの側面から考えれば、客体になるのは旅先の海辺であり、主体になるのは旅先の海辺にいる実朝であり、そして主体の実朝の心を触発するのは綱手である。また、主体の視点を、客体の旅先の「渚こぐあまの小舟」から綱手のほうへ移しつつ、それを「かなしも」という言葉に定着させ、歌人の「景観へのしみじみとした興趣、漁夫の生活への共感」を表すことによって、「渚こぐ」→「渚こぐあまの」→「渚こぐあまの小舟の」→「渚こぐあまの小舟の綱手」（渚→あま→小舟→綱手）と繋がる連続性が示される。その結果、渚の情景を巡って連想の修飾構造が機能し、遠近感に満ちた歌の構図が構築されている。

---

[49] 橘本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳（1989）日本古典文学全集50「近代秀歌」『歌論集』小学館。p.471。1989年4月30日初版発行。

[50] 井上宗雄校注・訳（2000）新編日本古典文学全集49『中世和歌集』「金槐和歌集」（p.108）の頭注。

臺灣大學學術期刊資料庫

この歌には、一般的な歌枕として明確に扱われるものが詠み込まれていないものの、『能因歌枕』には「**なぎさ**とは、池うみなどのほとりをいふ。」と記載されているので、渚を、この歌の歌枕と見なしてよいと思われる。となれば、この点においてもこの歌が第二章の（三）で述べた「旅に触発された種々の感情を主題とする」羈旅・羇旅、羈旅歌の定義によって示される要素を内包することになる。

以上、『百人一首』の 4 首の羈旅歌の修辞について考察した結果、これらには本歌取り、歌枕、掛詞、二句切れ、四句切れ、体言止め、擬人法、倒置法、見立てといった修辞技法が活用されていることが知られた。また、これら 4 首の詠まれた時代が異なるものの、こうした和歌の修辞技法や歌語が生かされた実態を見れば、実朝の歌に認められた本歌取りのように、定家の求める「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」という作歌の目標を目指そうとする姿をも伺うことができた。さらに、羈旅に関わる歌枕を生かし、主体としての歌人（故郷）とその客体である羈旅先（異郷）の感懐、心情、そして羈旅・羇旅が本来的に持つ絆が故郷と異郷とを結びつけることにより触発される要素を、以上で扱ったすべての羈旅歌に見出すことのできることが確認できた。ここには遠近法の如く視野全体を広域から狭域へと収束させ、焦点を絞っていくことによって凝縮される図柄が構築されている。

のみならず、旅という行為自体が異郷である旅先へ心情を傾けるものであるがゆえに、羈旅歌は時として悲別にも繋がり、心底に沈潜し脳裏に浮かぶ郷愁のイメージへと結びつく。かくて羈旅歌は、その字面の如くあたかも手綱で縛られているかのように、異郷に流される拘束を伴う羇旅（羇留）にも通じることとなる。

四、定家の撰歌意識との接点

以上に見たように、今回対象とした『百人一首』4 首の羈旅歌は、『万葉集』の羇旅歌といささか異なる。すなわち『万葉集』の羇旅歌は旅先での単なる所感を詠んだものであるが、一方、『百人一首』

臺灣大學學術期刊資料庫

の羈旅歌は、それぞれが留学先で故国に思いを寄せる歌、遠島流罪の身で故郷を思う歌、近郊に行楽に出た際の即興の歌、そして海辺の漁師の風景に感慨を示した歌である。『万葉集』の作品も『百人一首』の作品も、いずれも羈旅歌の範疇に収められるものであるとは言え、両者には質的な違いがあり、ここには成書過程での編者の撰歌意識の違いが反映されていると見ることができよう。となれば、恋や秋の歌が多い『百人一首』の中に定家は何故にこの 4 首の羈旅歌を撰入したのかが関心の対象となる。そこでこの 4 首の作品をあらためて概観すれば、その背景にはいずれも波乱に満ちた歌人の人生があり、その境遇が作品に色濃く反映されているという共通点を見い出すことができる。管見に基づけば、ここに定家の撰歌意識を探るよすがが潜んでいるのではないかと思われる。そこで以下ではこの観点に基づき、定家の撰歌意識の一端を明らかにすることを試みる。

「百人一首が必ずしも一流歌人の集合体でないこと、普通の秀歌撰ではないこと、一つの主題でできないこと[51]」は已に指摘されている。その見解通り、今回扱った 4 首の羈旅歌はいずれも秀歌であるが、「普通の秀歌」ではない。前述したように、遣唐留学生として長く唐土に滞在し帰国が叶わないまま望郷の想いを歌に託した安倍仲麿、副使として遣唐使に任じられたものの欠陥のある大使の船と交替させられたことにより嵯峨天皇の命令を拒否して隠岐に流された小野篁、遣唐使の廃止を建言し、藤原時平による天皇への讒言により大宰府に左遷され間もなくそこで生涯を終えた菅原道真、さらに渡宋計画が実現しないまま鎌倉幕府での権力闘争に翻弄されつつ 28 歳の若さで甥の公暁によって暗殺された源実朝といった 4 人は、いずれも本来は歌や漢詩の才能を持っており、暫しは時を得たにもかかわらず、政治の大きな力の下で不運をかこち、流罪に遭い、左

[51] 吉海直人（2024）『百人一首の正体』p.123　KADOKAWA（2016 年 10 月 25 日初版発行）

臺灣大學學術期刊資料庫

遷を受け、暗殺されるという波乱に満ちた人生を送った悲劇的な人物[52]である。

こうした観点に基づいて、『百人一首』撰者としての定家にあらためて目を向けると、定家は承久の乱の関係者としての後鳥羽院と鎌倉幕府との狭間でやむなく進退不如意の立場に置かれ、政治の分野においても文学理念の面においても自らの意志を貫くことが容易でなかったことが知られている。『百人一首』編纂過程において、政治的な配慮があったか否かについては推測し難いものの、以上の観察に基づけば、『百人一首』に撰入すべき作品としての評価基準として、単に作品の修辞技巧や作者の才能天分に注目するのみではなく、自らが人生に抱く理想を実現できないまま、不運をかこちながらもそれを作品に昇華させる技量を評価しようとした姿勢を読み取ることができる。つまり、晩年の定家は漂泊の中で不運をかこつ哀情が詠み込まれた作品に共感を抱き、それらを羈旅歌として撰入したと推測できよう。

とりわけここで注目したいのは、遥かな旅路を隔てた異郷への旅や故なくして受けた流罪によって、空間的に隔てられ、精神的に囚われる惨状に陥った人物への視線である。

前述したように、羈旅歌の作者 4 人はいずれも優れた歌人ではあったが、不運の境遇の中でそれぞれ異国での客死、流罪による不遇、左遷先での他界、暗殺による死亡という人生における壮大な羈旅を経験している。これらの悲劇的な人物について、定家はどのような心情を抱いていたのであろうか。『百人一首』全体を見渡せば、それについて示唆を与えてくれる作品が存在する。定家自身が自歌を撰んだ第 97 番の歌がそれであろう。

来ぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ

定家は初句で「来ぬ人」と述べ、尾句で「身もこがれつつ」と詠み、「来ぬ人」に熱い心を寄せる。定家のこうした心情に思いを馳せ

[52] 「関幸彦（2021）は『百人一首の歴史学』p.18　吉川弘文館」において「悲劇を背負った人々」と解説している。

臺灣人學術期刊資料庫

つつこの恋歌を吟味すれば、実朝のための口伝として書かれた『近代秀歌』の一句が思い起こされる。そこには、晩年にさしかかろうとする定家が自ら「詞の花色を忘れ心の泉源枯れて[53]」と告白する一方で、「今こひ願ひ侍る歌のさま」を強く焦がれ求める心情が示されている。そのため、この「来ぬ人」に悲劇的人物を仮託し、「身もこがれつつ」それを待つ定家の晩年の姿を読み取ることが可能であれば、とりわけ思い至るのは親しく教え導いた実朝が暗殺に遭い、「来ぬ人」となってしまった事実である。この点に注目すれば、天賦の才に恵まれながらも悲運の下で「来ぬ人」となった実朝への定家の深情を、この歌に読み取ることができよう。定家がこの「来ぬ人」に悲劇的人物としての実朝を仮託し、「身もこがれつつ 」彼の人を待ち望む心情を吐露するからには、小論で扱った 4 首の羈旅歌全体にこの視点を持ち込むことが可能となろう。とすれば、定家が 4 首の羈旅歌を『百人一首』に撰入した事情がここにより明らかに見えてくる。これらの 4 首が撰ばれた背景の一つとして、「来ぬ人」となった悲劇的な人生への憐れみと鎮魂の意図が込められていることを伺い知ることができるのではなかろうか。

鎮魂と言えば、吉海直人氏の「後鳥羽院歌を含む百人一首では、後鳥羽院の鎮魂というのは、ほとんど無意味ではないでしょうか」という見解[54]に思い至る。これは織田正吉氏の「謎解き本において、後鳥羽院への鎮魂が最終目標となっています」とする見方に対しての言及である。小論は以上に述べた諸点に基づき、鎮魂の対象は後鳥羽院ではなく、時代に翻弄されながらも羈旅歌を詠じた悲劇的な 4 人であり、中でもとりわけ歌才に恵まれつつ悲劇的な最期を遂げた右大臣源実朝であると解するものである。

---

53 「いはむや老に臨みて後、病も重く憂へも深く沈み侍りにしかば、詞の花色を忘れ心の泉源枯れて、物をとかく思ひ続くることも侍らざりしかば、いよいよ跡かたなく思ひ捨て侍りにき。」(橋本不美男、有吉保、藤平春男(2006)『新編日本古典文学全集 87　歌論集』に収録される『近代秀歌』p.451 に見い出すことができる。)

54 同注 51。

臺灣大學學術期刊資料庫

なお、『百人一首』全体の配列は歌人の時代順であるため、上代、中古、中世前期という日本古典文学史の流れをそこに明確に読み取ることができる。今回考察対象とした 4 人の歌人と 4 首の羈旅歌の時代に目を向けると、『百人一首』が構築している上代、中古、中世前期という変遷の中で、4 人の歌人と 4 首の羈旅歌を通じて、上代から中世前期にかけての小さな日本古典文学史の静かな流れを読み取ることができよう。これは、定家が撰歌する際に、大きな日本文学史の中における「小文学史」という時代観念に基づきつつ、意図的に史的概念を組み込んでこの歌集を構成しようとした一つの撰歌意識の表れによるものではなかろうか。

五、結語

以上、羈旅と羈旅歌、羈旅歌の修辞、そして定家の撰歌意識の三つの側面を通して考察した。羈旅歌は、旅における体験・感情、感懐を詠んだものであり、羈旅の感慨を触発する触媒は、羈旅（羇旅）の字義に内包される「馬絆」「馬絡」（本論第二章の（一）、『廣韻・上平聲・支・羈』）であり、これが和歌の修辞技法の効果と相まって手綱のように機能する結果、異国と母国、異郷と故郷、客体と主体を一つの繋がりとして一体化させ、時代を超えて読者の共感を呼ぶものとして作品が後世に伝えられる。

藤原定家は羈旅歌にも「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿を願ひて」という理念を求め、その過程の中で、天賦の才に恵まれながらも悲運の下で「来ぬ人」となった実朝を始め、唐・隠岐・大宰府といった異国・異郷を羈旅し、忘れがたい故郷に帰ることのできなかった安倍仲麿、菅原道真、小野篁へ深情を寄せることで、羈旅歌に新しい価値を付加し、それが『百人一首』の撰歌意識の一部を構成することに繋がった。

羈旅歌 4 首の作者の経歴がいずれも唐土への旅に関連を持つという観点で空間的な旅路を経ているだけでなく、歴史的な観点から見ても、それらの作品は日本古典文学史の流れのように奈良時代から

臺灣大學學術期刊資料庫

平安時代を経て鎌倉時代へと至る道程を経ている。したがって『百人一首』の羈旅歌は、本論の四において述べた如く、この秀歌集の中で空間の旅と時間の旅をともに実現しつつ、時代に翻弄された悲劇的な歌人への鎮魂を示すものとして成立していると解される。

【付記】本発表の原稿は、「国家科学及技術委員会」の研究助成（NSTC112-2410-H-030-033）による研究成果の一部であり、2024年12月7日に行われた「2024日本言語文藝研究學會研討會」での発表をもとに加筆、改題、修正したものである。ここに記して各位に感謝の意を表します。

【参考文献】

今井福治郎（1954）「羈旅について」『国文学：解釈と鑑賞』19-4、pp.39-42　至文堂

藤原定家（1978）『明月記』第三、p.465　国書刊行会

蔵中進（1986）「『古今和歌集』羈旅歌巻の成立―遣唐使と紀氏」『文学』54-2、pp.152-166　岩波書店

梶裕史（1988）「万葉集羈旅歌論」『三田國文』9-6、p1-15　慶應義塾大学国文学研究室

安田徳子（1988）「旅人のいる風景―羈旅歌の変遷をめぐって―」『名古屋大学文学部研究論集：文学』34、pp.201-213　名古屋大学文学部

橋本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳（1989）『日本古典文学全集50　歌論集』「近代秀歌」小学館（1989年4月30日初版発行）

有吉保（1991）『和歌文学辞典』桜楓社

安田徳子（1991）「実詠から題詠へ:羈旅歌の変容をめぐって」『国語国文学』10、pp.1-15　聖徳学園岐阜教育大学

村瀬憲夫（1994）「八代集離別歌羈旅歌考」『文学・芸術・文化：近畿大学文芸学部論集』6-1、pp.1-14近畿大学文芸学部

臺灣大學學術期刊資料庫

小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集6　萬葉集』小学館

小沢正夫、松田成穂校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集11　古今和歌集』小学館

島津忠夫（1994）「小倉百人一首の性格―定家の撰歌意識を中心に―」『百人一首と秀歌撰』pp.145-146　風間書房

小島憲之、木下正俊、東野治之（1996）『新編日本古典文学全集9　萬葉集4』小学館

大浦誠士（1997）「羈旅歌の成立―人麻呂羈旅歌八首をめぐって」『上代文学』78、pp.50-65　上代文学会

菅野禮行（1999）『新編日本古典文学全集19　和漢朗詠集』p.142　小学館

井上宗雄校注・訳（2000）「金槐和歌集」『新編日本古典文学全集49　中世和歌集』小学館

北原保雄（2000～2002）『日本国語大辞典 第二版』小学館（ジャパンナレッジ）

黒板勝美編（2004）『新訂増補国史大系』第11巻、pp.1-30　吉川弘文館

小島憲之、木下正俊、東野治之（2006）『新編日本古典文学全集6　萬葉集1』小学館

小島憲之、木下正俊、東野治之（2006）『新編日本古典文学全集8　萬葉集3』小学館

橋本不美男、有吉保、藤平春男（2006）「近代秀歌」『新編日本古典文学全集87　歌論集』小学館

今関敏子（2006）「旅寝の夢 その1:勅撰集羈旅歌の類型」『川村学園女子大学研究紀要』17-2、pp.194-184　川村学園女子大学

中川博夫（2009）「『新古今集』の羈旅歌二首試解―「言問へよ」と「宿問へば」」『国文鶴見』43、pp.1-7　鶴見大学日本文学会

関谷由一（2013）「柿本人麻呂「羈旅歌八首」の位置：〈羈旅〉主題化の始発」『国語国文研究』144、pp.14-31　北海道大学国語国文学会

臺灣大學學術期刊資料庫

久保田淳、馬場あき子（2014）OD版『歌ことば歌枕大辞典』KDOKAWA
陳錦清（2014）「關于八代集羈旅歌的考察—以『新古今集』爲中心—」『臺大日本語文研究』28、pp.1-15　台湾大学日本語文学系
関幸彦（2021）『百人一首の歴史学』p.18　吉川弘文館
関谷由一著（2021）『万葉集羈旅歌論』北海道大学出版会
中川博夫、田渕句美子、渡邊裕美（2022）『百人一首の現在』青簡舎
吉海直人（2023）「『百人一首』の未来—非定家撰説の是非を問う」『古代文学研究 第二次』2023巻32号、pp.33-46　古代文学研究会
有吉保（2024）『百人一首　全訳注』東京：講談社
吉海直人（2024）『百人一首の正体』KADOKAWA
田渕句美子（2024）『百人一首—編纂がひらく小宇宙』岩波書店、p.102

ネット資料

経済雑誌社編（1897）『国史大系第 3 巻　續日本後紀』経済雑誌社（https://dl.ndl.go.jp/pid/991093）国立国会図書館デジタルコレクション
経済雑誌社編（1917）『六国史：国史大系再版　続日本紀』経済雑誌社（https://dl.ndl.go.jp/pid/950694）国立国会図書館デジタルコレクション
東京新聞（2023）「東京ブックカフェ」『東京新聞デジタル』（https://www.tokyo-np.co.jp/article/225504）2023 年 1 月 16 日
教育部『異體字字典』https://dict.variants.moe.edu.tw/dictView.jsp?ID=67300（B03531 羈、解說）
『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』https://ctext.org/text.pl?node=289223&if=gb#n289226 （廣韻、羈）
『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E7%BE%87（康熙字典：頁 950 第 26）
『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』https://ctext.org/dictionary.pl?if=gb&char=%E6%97%85（康熙字典：頁 483 第 02）
『易学網』https://www.eee-learning.com/book/533（『周易集解』卷十一「旅卦」第五十六）

臺灣大學學術期刊資料庫

『數位經典』https://www.chineseclassic.com/13jing/zoezuan/ch03_22.htm（『左傳』「莊公二十二年」）

『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』https://ctext.org/han-shu/xu-zhuan/zh　（漢書、敘傳）

『能因歌枕（廣本）』（https://saigyo.sakura.ne.jp/noinutamakura.html）

『諸子百家　中國哲學書電子化計劃』https://ctext.org/chu-ci/jiu-bian/zh（楚辭：九辯）

『Japan Knowledge』https://japanknowledge-com.eu1.proxy.openathens.net（日本国語大辞典）

『日本紀略』「後篇第一：醍醐天皇」（https://miko.org/~uraki/kuon/furu/text/kiryaku/b01.htm）

『古事類苑全文データベース』「帝王部/太上天皇〈追尊天皇附〉」（https://ys.nichibun.ac.jp/kojiruien/）

臺灣大學學術期刊資料庫